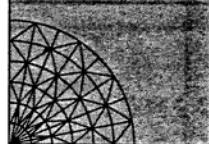


# モノグラフ・高校生'87

vol.20「大学へ進学しない生徒たち」



放送大学教授 深谷昌志

## ● 目次

まとめと要約	2
第I章 テーマ設定とサンプル構成	4
1. それぞれの人生を認めつつ	4
2. 調査サンプル	5
第II章 学校生活の重み	6
1. 進路により三層化	6
2. 学校生活の楽しさ	8
3. 入りたい学校だったか	10
4. 学業成績との関連	12
第III章 マス・メディアとのつきあい	15
1. 家庭学習の長さ	15
2. テレビとのふれあい	17
3. タレントの好き嫌い	20
4. 音楽をBGMとして	22
5. マンガや雑誌	24
第IV章 自己像と未来像	29
1. こづかいの額	29
2. アルバイトの体験	32
3. 自分についての評価	34
4. 未来への見通し	40
まとめに代えて	43
資料 調査票見本および集計表	46

\*おことわり 本文中に使用した写真は、本文、テーマとは一切関係ありません。

## まとめと要約



サンプルを高校卒業後つとめるつもりの「つとめ群」と、「専修（学校）群」、「（4年制）大学群」とに分けた。

① 学校生活の楽しさ 学校生活の楽しさは予想に反して、つとめ群、専修学校群、大学進学群によってそれほど開きがみられなかった。(P. 9図1、P.10表5)

② この学校に入学してよかったです 入りたい学校だったかについては、進路による開きが少ない。しかし、入学してよかったですと思っているのは大学進学群と、つとめ群で、専修学校群の場合、この学校に入らなければよかったですという声が強まってくる。入学後、学校の欠点が見えてきたのか、それとも不適応をおこしたのか、であろう。

(P. 11表7、P. 12図2)

③ 学業成績の変化 つとめ群の3割は、小学高学年のうちから勉強が苦手だと思っている。それに対し、専修学校群に中学生になってから苦手意識を感じたタイプが多い。そ

して、現在は半数以上が勉強を苦手だと思っている。(P. 13図3)

④ 生活の中で勉強の占める重み つとめ群の52%、専修群の43%は、家庭での勉強をほとんどしていないのに対し、大学進学群の69%は、毎日1時間半以上勉強をしている。生活の中で、勉強の持つ重みが非進学者と進学者の生活を二分している。

⑤ テレビ視聴時間 つとめ群、専修学校群の中で、テレビを3時間以上見ている者は40%、28%を占める。それに対し、大学群は当然のことながらテレビをがまんしているので、1時間以内が37%を占める。(P.17図6)

⑥ 見ているテレビ番組 専修学校群は「オレたちひょうきん族」、つとめ群は「夜のヒットスタジオデラックス」を見ている割合が多い。大学群はニュースを見ているタイプである。(P. 19図7)

⑦ タレントの好き嫌い 大学群の中に中

森明菜嫌いが目につく。それに対し、専修群とつとめ群はビートたけしや明菜のファンで、その中でも専修群には松任谷由実が好きという生徒が多い。(P.21表13・P.22図8)

#### ⑧ 読んでいる雑誌

	よく読んでいる	読まない
つとめ群	ノンノ、明星 ぴあ、少年ジャンプ (特になし)	ぴあ、 少年ジャンプ (特になし)
専修群	ぴあ、ポパイ 少年ジャンプ、 少年サンデー	ノンノ、 フライテー
大学群		

(P.26表17・P.28図11)

⑨ こづかい 一か月に使うこづかいの額は、大学進学群がもっとも少なくて5,200円、次いでつとめ群の7,400円、専修群の8,600円となる。(P.31表20) 専修学校群は、それと一緒に物持ちもある。(P.30表19)

⑩ 自己像 友だちが多い、体力がある、ナウいなどの面で、もっとも明るい自己像を持っているのが専修群、次いでつとめ群。評価のもっとも低いのが大学群で、進学群にネクラで自信のない感じが目につく。それに対し、専修群はヤングらしい行動力がみうけられる。(P.36図15・P.39図16)

⑪ 未来への見通し しあわせな家庭を築けそうだと、多くの生徒たちは予想している。そうした中で、社会的な達成についても、専修群は明るい見通しを抱いている。そして、つとめ群も大学進学群とほぼ同じ程度の、少なくともそれほど暗くはない将来像を描いている。

#### <まとめとして>

非進学者層の暗さを予想して調査を始めたのだが、ネクラなのは進学者層で、専修学校群はヤングらしく、つとめ群には庶民的なマジメさがあった。そして、自己像や未来への展望についても、非進学者は決して暗いイメージを抱いていなかった。

非進学者の明るさを表面だけで、奥底に暗さがあるととらえるか。あるいは、明るさを認めた場合に、その明るさをどう解釈したらよいのか。この今まで、それなりの人生を過ごせると考えるのは甘いというのはやさしい。しかし、若者のまわりを見ていると、それなりの生活を送れる環境が備わっているのに気づく。そうだとすると、不必要なまでのやる気を秘めて、かたくなに生きていく態度は旧人類の発想なのかもしれない。そうしたさまざまな思いを抱かせてくれたのが、本調査の結果であった。

#### 〔調査概要〕

対象● 東京都、千葉県、神奈川県の  
6高校の2、3年生  
期間● 昭和61年7月～11月  
方法● 学校通しによる質問紙調査

サンプル数 (人)

性別	学年	1年生	2年生	3年生	計
男子		342	625	967	
女子		484	995	1,479	
計		826	1,620	2,446	

# 第Ⅰ章 テーマ設定とサンプル構成



## 1. それぞれの人生を認めつつ――

このモノグラフシリーズは、月例会を持っているのでその場でテーマをしづりこみ、同人の間で調査票を検討し合う形をとて現在を迎えてる。当然のことながら、テーマの決定はレポート作成の2年近く以前となる。

そうした同人会の席で進路というとき、大学進学を前提として考えてきたのではないか。少なくとも、進学をよりよき道、さらにいうならいわゆる一流の大学へ近づけば近づくほど、ベストの進路に近づく。無意識のうちにそういう前提を持っているので、同じ進学でもランクが下がるにつれて、ベターではなくなり、そして短大、専修学校となるにつれて、ワースの感じになる。そうした尺度からする

と、就職は望ましい進路からの挫折というイメージになる。

もちろん、一流大学への進学はベストという尺度をいつも持っているわけではないが、心の片隅に抱いているのではないか。そしてたしかに、社会的な達成を進路選択の尺度とするとき、たてまえはともかくほんねにあたる部分として、一流大学を尺度とするのが間違っているとはいいがたい。

しかし、ひとりひとりの生徒のしあわせをベースに考えるなら、それぞれの生徒なりの人生があつてよいのであって、どれがベターといいがたい。いわゆる一流大学を卒業し、大手の企業へ入ってビジネスマンとして働く、

眞の意味での成功者はほんの一握りで、あとの人には程度の差こそあれ窓際族となる。高校を卒業して板前の修業をし、やがて自分の店を持って、なじみの客に支えられつつ味で自慢の店を大きくしていく。あるいは、コンピューターの専修学校へ入って、OAの基本をマスターし、小規模の企業かもしれないが、

その会社にとってなくてはならぬ人になっていく。

どう考えてもそれぞれの人生で、第三者がこちらの方がベターといいにくい性質のものであろう。あとは、本人が自分の将来をいかに真剣に設計し、確信を抱いて、その道へ進もうとしているかであろう。

## 2. 調査サンプル

そうした話し合いの中で、大学へ進学しない生徒たちの心の内を、挫折というレッテルをはらずに、あらためて聞き取ってみたいと思い、巻末に付したような調査票を作成した。

もちろんこうしたテーマなので、進学しない生徒の多い学校をサンプルに選ぶ必要があるが、そうかといって非進学校だけだと、非進学の生徒の心の内がとらえにくいで、進学校から非進学校まで6校をサンプルに選んだ。また、高校1年生だと進路についての態度がはっきりしていないと思われる所以、高校1年生を対象から除外し、高校2、3年

生をサンプルに定めた。

また、非進学の生徒たちの調査をこれまでそれほど多く行っていないので、そうした生徒たちの心の内をしっかりとつかんでいるとはいいくらい。そこで、念のために、中学生を対象とした調査（くわしくは『モノグラフ・中学生の世界』、vol.25『中学生文化』）と項目を一部分重複させ、中学生と対比させて高校生像をとらえることにした。

なお、調査サンプルは表1のような構成で、サンプル数は2,446名である。調査は昭和61年7月から11月にかけて実施した。

表1 サンプル構成

学 校	性別	学 年		性 別		(人)
		2 年	3 年	男 子	女 子	
A	高等学校	215	216	208	223	431
B	専門学校	0	673	0	673	673
C	技術学校	143	164	0	307	307
D	高等専門学校	211	234	237	208	445
E	高等学校	61	143	136	68	204
F	専門学校	196	190	386	0	386
計		826	1,620	967	1,479	2,446

\* 6校とも所在地は関東

## 第II章 学校生活の重み



### 1. 進路により三層化

まず、サンプルの進路を示すと表2のとおりとなる。A校、E校の進学校と、C校の非進学校、短大進学者の多いB校などがまざっているので、全体としてみると本サンプルの56%は大学志望者、短大志望18%、就職志望12%、専修学校志望11%となる。

しかし、性別に進路を集計し直すと、

	男子	女子
すぐにつとめる	24.4%	75.6%
専修学校志望	36.6%	63.4%
短大志望	0.3%	99.7%
大学志望	49.9%	50.1%

となり、短大志望はほとんどが女子で、これをひとつのカテゴリーとしてみなすと、進路

でなく女子特有の反応が表面にでることが予想されるので、以下の分析にあたっては、「卒業したらすぐにつとめる」を「つとめ群」、「卒業したら専修学校に入る」を「専修群」、そして「大学群」とに、生徒たちを三分する形で考察を進めることにしたい。

なお、専修学校の中に、入試のむずかしい学校があるのもたしかだが、全体としてみると入試の勉強をそれほど必要としない場合が多いので、心理的な意味での進学層を「大学群」に限ることにした。したがって、専修群は形式的には進学だが、心理的には非進学の扱いをしてある。

なお、それぞれのグループの部活動の状況

を表3に示したが、運動部と文化部とに積極的に参加している生徒の割合は

運動部 + 文化部 = 計

1 「つとめ」群  $18.9\% + 18.5\% = 37.4\%$

2 「専修」群  $13.1\% + 14.3\% = 27.4\%$

3 「大学」群  $21.6\% + 15.6\% = 37.2\%$

のとおり、大学群がつとめ群とほぼ同じ程度に、部活動に参加しているのがわかる。少な

くとも、進学=部活動へ不参加、非進学=部活動という図式が成り立ちにくい。もちろん、進学といっても、かならずしもむずかしい大学への進学を意味していないし、2年生も含まれているので、こうした結果が生ずるのも当然なのかもしれないが、その中でも専修群の部活動参加者が少ないのが気がかりとなる。

表2 進路

—大学進学予定が56%—

(%)

属性 項目	全体	学年		性別		学校別					
		2年	3年	男子	女子	A校	B校	C校	D校	E校	F校
1. 卒業したら家の仕事をつぐ	0.7	1.0	0.6	1.6	0.2	0.0	0.2	0.8	0.8	0.5	2.6
2. 卒業したらすぐにつとめる	12.4	13.2	12.1	8.2	14.9	0.8	5.3	57.2	11.7	1.6	14.2
3. 卒業したら専修学校に入る	11.2	13.3	10.3	11.7	11.1	1.6	6.8	22.9	18.3	1.1	21.2
4. 卒業したら短大に入る	18.2	6.5	23.0	0.3	28.6	2.4	43.9	11.0	14.8	4.9	0.3
5. 卒業したら大学に入る	56.3	63.8	53.3	76.3	44.5	94.7	43.6	5.7	53.3	90.3	59.1
6. 卒業したら早めに結婚する	1.2	2.2	0.7	1.9	0.7	0.5	0.2	2.4	1.1	1.6	2.6

表3 部活動×属性

—大学群の方が部活動に熱心—

(%)

属性 項目	学年	性別		部活動					
		2年	3年	男子	女子	運動部	文化部	合計	その他
1. 入ったことがない。または今は入っていない	43.7	55.0	54.8	49.1	43.3	61.1	50.2	51.3	
2. 運動部に入り、積極的に参加	28.3	14.7	25.8	14.9	18.9	13.1	21.6	19.2	
3. 運動部に入っているが、サボリぎみ	6.7	3.0	6.7	2.7	2.8	4.2	4.7	4.3	
4. 文化部に入り、積極的に参加	12.7	16.6	8.4	19.8	18.5	14.3	15.6	15.3	
5. 文化部に入っているが、サボリぎみ	8.6	10.7	4.3	13.5	16.5	7.3	7.9	9.9	

## 2. 学校生活の楽しさ

進学か就職かで、学校生活の意味がことなってくる。進学者にとっては高校は大学への通過駅だが、つとめ群にとって高校は最終の学校となる。

それでは、生徒たちは、どのような気持ちで学校生活を送っているのか。学校生活についてのトータルとしての気持ちは表4にくわしい。「遅刻はしないし、休み時間や昼食の時間は楽しいが、発言をあまりしないし、勉強は得意とはいえない」が、生徒たちの平均値となる。

そこで、学校生活についての気持ちが進路によってどの程度ことなるのかを示すと、図1・表5となる。正直にいって、集計を始めるまで、進学群は意欲を持って学校へ通っているので、学校が楽しい。しかしつとめ群は、学校にある程度まで不満感を抱いているのではと思っていた。ところが、図1によると、学校に対する気持ちに進路による開きがそれほど認められなかった。

- ① 学校へ行く楽しみ 大学>つとめ=専修
- ② 昼食が楽しみ つとめ=大学=専修

表4 学校生活の楽しさ

——遅刻はしない——

項目	尺度					(%)
	とても そう思う	わりど う思う	やや そう思う	あまり とう 思わない	ぜんぜん とう 思わない	
① 学校へ行くのが楽しみだ	7.8	24.0	22.2	29.7	16.3	
② 休み時間が楽しめた	20.7	25.7	24.8	20.5	8.3	
③ 昼食が楽しい	21.5	25.7	24.1	20.4	8.3	
④ 授業中はまじめにこなしている	6.8	27.2	30.1	23.4	12.5	
⑤ 発言をよくする	2.1	3.9	11.3	40.1	42.6	
⑥ 休憩をよく取る	18.1	26.2	24.6	21.4	9.7	
⑦ 朝寝をよくする	8.8	22.1	32.0	24.4	12.7	
⑧ おもしろい本をよく読む	13.7	28.0	26.9	22.2	9.2	
⑨ おもてなしをよくする	42.3	19.0	13.2	14.5	11.0	
⑩ おしゃべりをよくする	2.1	5.0	15.9	43.4	33.6	

( ) = 最頻値

- ③ 遅刻をしない つとめ>大学>専修  
 ④ 授業を majime に聞く 大学>つとめ=専修  
 ⑤ 勉強が得意 大学>つとめ=専修  
 このようにみると、どの進路をとるにせよ生徒たちは、けっこうまじめに学校へ通

っており、そうした中でもつとめ群のまじめさが目につく。ただ、専修学校へ通うつもりの生徒がややイージーな感じで学校生活を送っているのが気がかりとなる。

図1 学校生活の楽しさ×進路  
——つとめ群はまじめ——

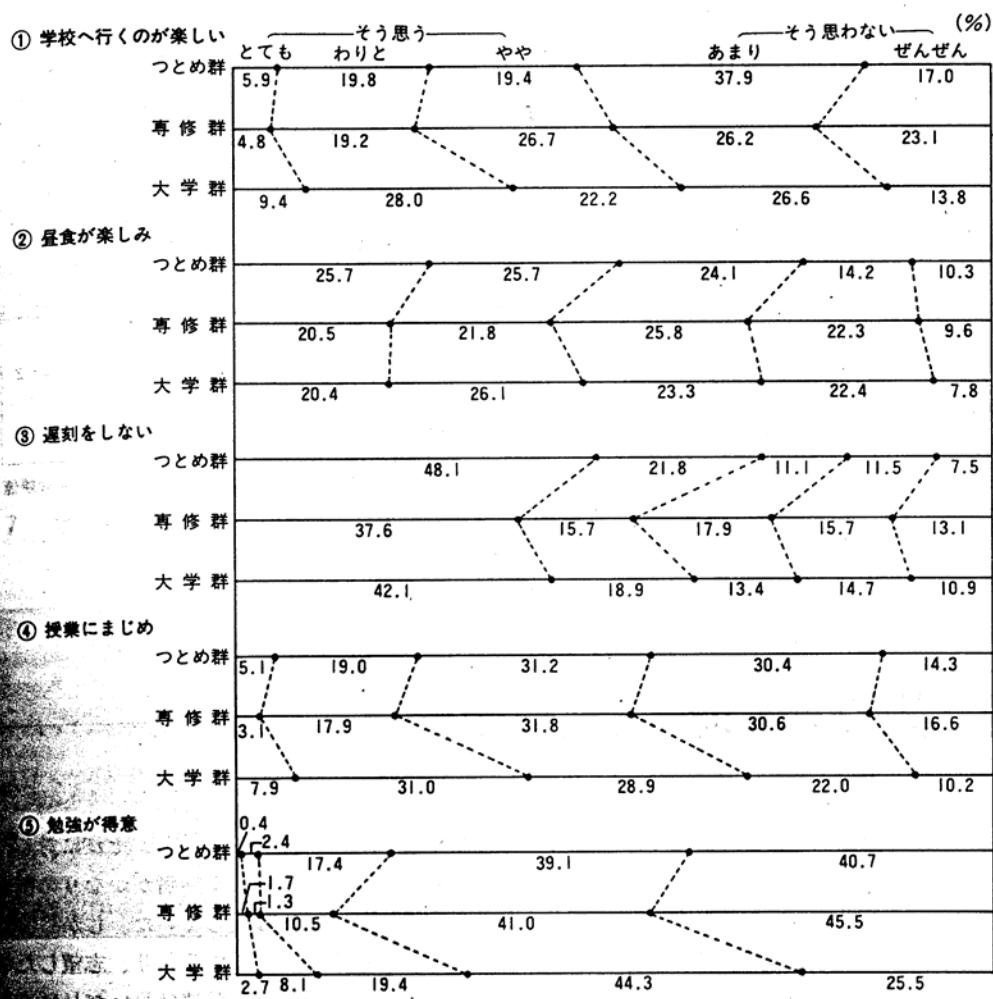


表5 学校生活×属性

——大学群は勉強をきちんと——

(%)

属性 項目	学年		性別		部活動			進路		
	2年	3年	男子	女子	入っていらない	運動	文化	つとめ	専修	大学
① 学校へ行くのが楽しみだ	6.6	8.4	7.2	8.2	7.0	10.2	10.3	5.9	4.8	9.4
② 休み時間が楽しみだ	22.3	> 19.9	21.7	20.0	17.1	27.6	23.0	20.2	= 21.0	= 21.2
③ 昼食が楽しい	20.5	22.1	17.0	< 24.5	18.5	24.0	25.7	25.7	20.5	20.4
④ 授業中はまじめにとりくんでいる	5.3	7.6	7.6	6.3	6.5	1.0	10.0	5.1	3.1	7.9
⑤ 発言をよくする	2.6	1.8	4.1	0.7	1.9	3.4	0.8	1.6	3.1	2.1
⑥ 宿題や提出物は、期限までにきちんとやる	14.2	20.1	18.3	18.0	17.1	16.2	< 27.8	15.8	11.8	20.7
⑦ テスト勉強はがんばる	9.1	8.6	9.5	8.3	7.7	10.3	11.6	6.7	6.6	10.2
⑧ 忘れものをしない	11.6	14.7	16.3	12.0	12.7	< 14.2	< 19.5	12.3	12.3	15.0
⑨ 遅刻はしない	37.6	< 44.7	41.1	43.2	39.2	< 41.4	< 55.6	48.0	37.6	42.2
⑩ 勉強は得意なほうである	2.4	1.9	3.8	1.0	2.1	2.2	2.2	0.4	1.7	2.7

「とてもそう思う」割合

○=最頻値

### 3. 入りたい学校だったか

なお、学校生活の楽しさに関連させて、それぞれの高校は入りたくて希望したところなのかをたずねてみた。表6のように、「はじめから希望していた」者は27%で、半数以上は他校を望んでいたという。そうした中で、進路別のクロス集計の結果欄をみると、「はじめから希望していた」者の割合は、専修学校群の26%から大学進学群の29%まで、3%ほどの開きしか示していない。

このあたりも、ステレオタイプの見方といってしまえばそれまでだが、進学群の中に希

望した学校に入った者が多く、それに対しつとめ群は望みの学校でない者がかなりの割合を占めるのではと仮定していた。しかし、表6の結果を手がかりにする限り、志望した学校だったかと進路との関連は見いだしにくかった。

もっとも、表7の今の高校に「入ってよかったです」と思うかどうかについては、ほとんど聞きが認められない。この間の関係をグラフ化してみると、図2のようになる。つまり大学進学群とつとめ群は、入ったときの気持ちが

それほど変わらずに現在を迎えていたが、専修学校群の中に、今の学校に対する失望の色が強い。この調査だけから、その理由を探るのはむずかしいが、学校に対する不満が専修学校群に色こくあらわれているのは注目に値

しよう。学校生活を過ごすうちに、なにかの不適応が生じ、それが専修志願の原因となつたのか、あるいは専修志願を考えるようになつてから学校に不満が強まったのか。今後の検討が必要となろう。

表6 希望した高校か  
——他校希望が6割——

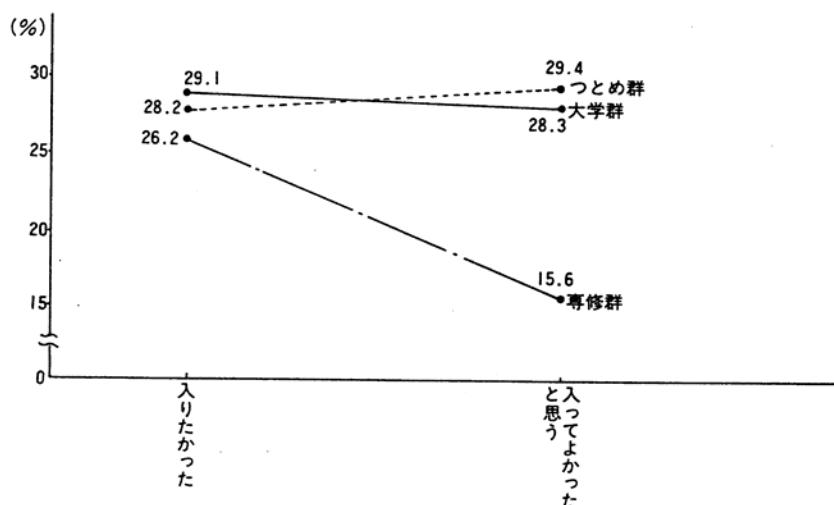
属性 項目	全体	学年		性別		学校						進路			(%)
		2年	3年	男子	女子	A	B	C	D	E	F	つとめ	専修	大学	
1.はじめから希望していた	26.7	30.9	24.6	25.6	27.4	60.1	18.7	17.9	25.3	17.9	16.8	28.2	26.2	29.1	
2.他の学校を希望していた	(56.8)	48.4	60.9	54.1	58.4	24.5	72.6	51.9	59.7	72.1	56.4	45.1	50.6	59.2	
3.どこでもよいと思った	13.1	15.7	11.9	15.1	11.9	13.3	6.8	25.0	13.2	5.5	19.2	22.9	17.3	9.1	
4.ほんとうは高校には行きたいなかった	3.4	5.0	2.6	5.2	2.3	2.1	1.9	5.2	1.8	4.5	7.6	3.8	5.9	2.6	

表7 今の高校に入ってよかつたか  
——よかつた・よくなかったが半々——

属性 項目	全体	学年		性別		部活動			進路			(%)
		2年	3年	男子	女子	入っていらない	運動	文化	つとめ	専修	大学	
1.入ってよかつた	22.0	26.1	19.9	21.4	22.3	14.6	33.3	34.4	29.4	15.6	28.3	
2.たんだん入ってよかつたと思えるようになってきた	37.5	28.6	42.1	27.5	44.0	37.4	32.7	42.8	30.1	35.9	36.1	
3.たんだん入らなければよかつたと思うようになってきた	20.0	25.3	17.3	25.9	16.3	23.0	19.0	11.4	23.8	27.6	16.1	
4.入らなければよかつたとなり	20.5	20.0	20.7	25.2	17.4	25.0	15.0	11.4	16.7	20.9	19.5	

図2 入りたい学校だったか、入ってよかったですと思うか

——専修群に不適応が目につく——



## 4. 学業成績との関連

それでは、進路によって学業成績面での開きが認められるかどうかを調べてみよう。全体としてみると、表8のように、勉強が「とても得意」の生徒の割合が、子どもの頃の2割から、中学生になると1割となり、現在は1.5%へ低下している。

成長するにつれて苦手意識を持つようになるのが学業成績なのかもしれないが、それを進路別に集計すると、図3のようなプロフィールとなる。「とても」に「かなり」を加えて、勉強に苦手意識を抱く生徒の割合を概数の形で算出してみよう。

	小学 2~3年	小学 5~6年	中学 3年	現在
つとめ群	19%	30%	48%	50%
専修群	18%	23%	42%	63%
大学群	14%	11%	15%	37%

さすがに、大学進学群は中学生の頃まで、少なくとも勉強が苦手でなかった。それに対し、つとめ群はすでに小学高学年生の頃に3

割の子が苦手意識を抱いている。こうした意味では、つとめ群は、子どもの頃から勉強は不向きを感じている可能性が強いが、専修学校群は、子どもの頃それほど苦手でなかったのに、中学生になってから苦手意識を感じ始めたタイプが多い。

そして、図4に成績の現状を示したが、つとめ群の5割、専修学校群の63%が勉強が苦手だと答えている。したがって、勉強の苦手意識が非進学の態度をもたらしたのはたしかのように考えられるが、進学群の中にも、苦手と答えている者が37%を占めるので、苦手意識だけが非進学を決定させたとはいえないのかもしれない。

なお、スポーツの腕前に対する自己評価を表9に掲げたが、当然のことながら「スポーツは普通程度」の生徒が4割を超えるが、スポーツの腕前と進路との関係は認められなかった。

表8 学業成績の変化

—苦手がふえる—

(%)

尺度 項目	とても苦手	かなり苦手	ふつうくらい	やや得意	とても得意
① 小学2～3年の頃	7.6	7.8	40.8	22.0	21.8
② 小学5～6年の頃	6.4	9.6	38.4	27.2	18.4
③ 中学3年の頃	7.8	17.2	41.0	23.4	10.6
④ 現在	15.8	30.3	44.5	7.9	1.5

図3 成績×進路

—大学>つとめ>専修—

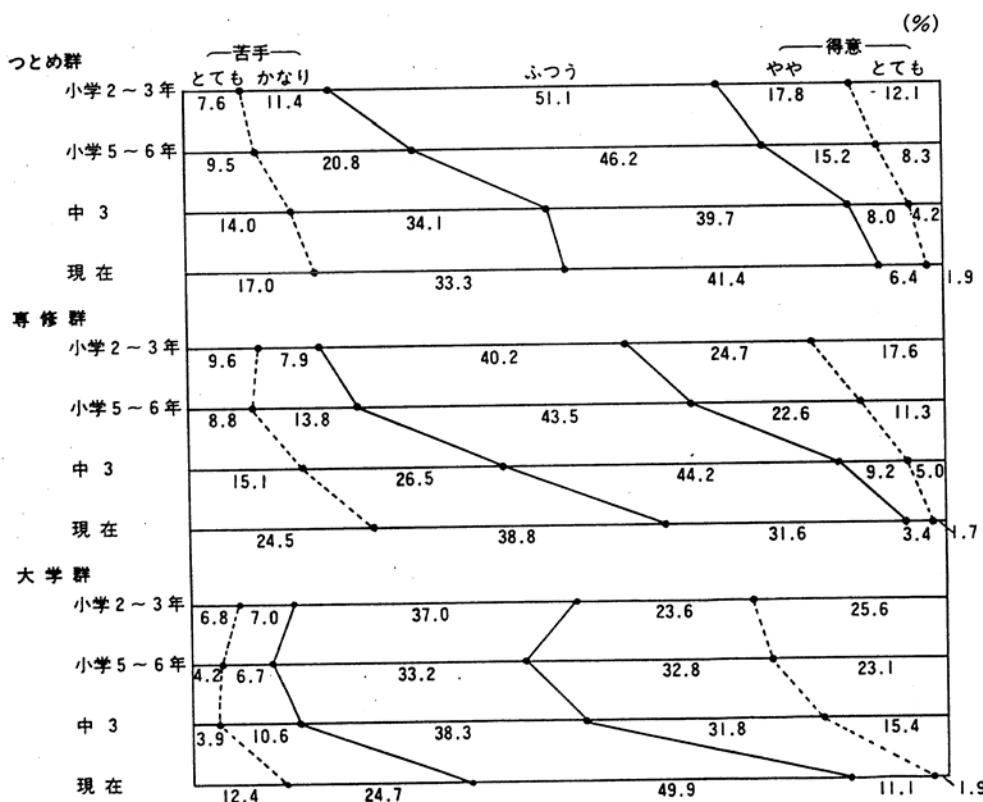


図4 成績の現状×進路

——半数が苦手——

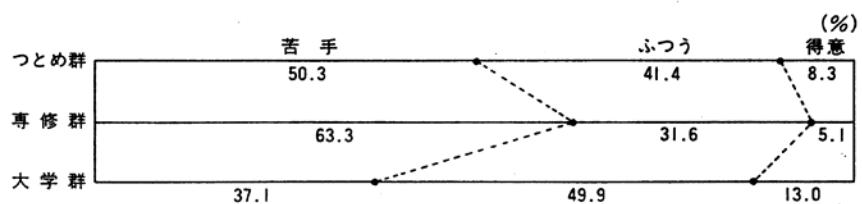


表9 スポーツの腕前

——男子はスポーツ好き——

尺度		プロ級で ある	かなり うまいもん	ふつうの人 くらい	あまり うまくない	無記入
属性	年齢					(%)
性別	21歳	8.9	22.0	39.4	9.1	20.6
	33歳	6.0	21.0	42.5	7.6	22.9
進路	男子	15.1	27.5	34.3	6.1	17.0
	女子	1.8	17.4	45.8	9.4	25.6
進路	つとめ群	5.3	16.5	45.5	7.1	25.6
	専修群	8.8	21.8	35.5	12.1	21.8
	大学群	7.7	26.1	40.9	6.7	18.6
合計		7.0	21.4	41.4	8.1	22.1

## 第III章 マス・メディアとのつきあい



### 1. 家庭学習の長さ

学校から帰った生徒たちは、どのようにして家庭での時間を過ごしているのか。まず、家庭での勉強時間については、表10・図5のような結果が得られている。

つとめ群の場合、半数の生徒はほとんど勉強をしていないし、1時間以内を含めると、9割近い生徒が家庭での勉強をしていない計算になる。そして、専修学校群も、大半の生徒が家庭学習を放棄している。それに対し大学進学群は、当然のこととはいえ、7割の生徒が1時間半以上を勉強に費やしている。

したがって、生活のスタイルに着目すると、

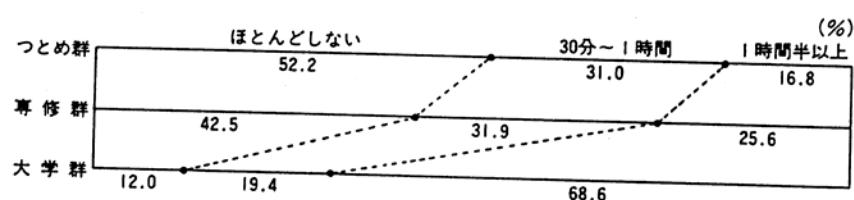
つとめ群や専修学校群の非進学層は家庭での勉強をしないでいいのに対し、大学進学群は少なくとも、1時間半以上は勉強をしなければならない。生活の中で、勉強の占める重みが進学者と非進学者とでことなり、生活時間からいうと勉強を義務づけられているのが進学者、勉強から解放されているのが非進学者となる。家庭へ戻ったら、机へ向かうのがあたり前というのと机へ向かわなくともよいというのでは、心の面でもさまざまな違いが生ずるであろう。

表10 毎日の家の勉強時間（土、日をのぞく）  
——非進学群はのんびり——

年齢	(%)						
	ほとんどしない	30分	時間	時間半	1時間	1時間半以上	合計
15歳未満	36.8	14.1	18.9	11.8	12.4	2.9	3.1
	16.3	6.4	10.7	8.0	16.5	13.1	29.0
16歳	28.7	11.0	14.9	10.3	15.6	5.7	13.8
	20.0	7.7	12.5	8.6	14.8	12.2	24.2
17歳	25.5	8.2	12.7	8.0	14.4	9.6	21.6
	25.4	10.4	14.1	9.8	15.6	9.5	15.2
18歳	27.8	13.5	26.0	13.5	6.7	4.8	7.7
	14.0	8.5	12.3	9.9	17.8	11.0	26.5
19歳	21.4	10.0	10.9	11.3	18.4	12.1	15.9
	52.2	15.5	15.5	8.0	4.2	2.7	1.9
20歳	42.5	13.2	18.7	8.1	8.1	5.1	4.3
	12.0	6.9	12.5	9.4	19.1	11.1	29.0
全 体	23.3	9.0	13.4	9.3	15.1	9.7	20.2

尺度：1日に勉強する時間

図5 勉強時間×進路  
——大学群は勉強——



## 2. テレビとのふれあい

それでは、家庭学習のそうした開きは、生活の中にどのような影響を与えているのであるか。まず、テレビ視聴時間を調べると、全体としてみると、表11のような結果が得られるが、これを進路別に集計したのが図6のグラフとなる。

毎日3時間以上テレビを見る生徒は、つと

め群の4割、専修学校群の3割に達するが、大学進学群の37%は、テレビを1時間以内しか見ていないという。

したがって、図6の結果を図5と重ね合わせると、  
進学者=テレビを見ずに、勉強をする  
非進学者=勉強から解放されテレビを見られる

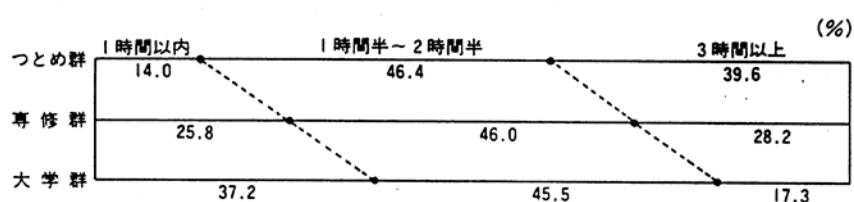
表11 1日にテレビを見る時間（土、日をのぞく）

——大学群はがまん——

属性	尺度	(%)							
		30分以内	1時間以内	1時間半～2時間	2時間以内	2時間半～3時間	3時間以内	4時間以内	5時間以上
学年	2年	7.3	16.6	14.9	23.5	10.9	15.2	6.7	4.9
	3年	10.0	24.1	16.4	20.7	8.9	11.0	5.6	3.3
性別	男子	7.8	15.4	14.6	22.8	9.8	14.4	8.4	6.8
	女子	9.8	25.8	16.7	20.7	9.5	11.2	4.4	1.9
進路	つどめ群	5.3	8.7	15.8	21.9	8.7	22.6	12.8	4.2
	専修群	4.2	21.6	11.4	19.4	15.2	13.5	8.4	6.3
	大学群	12.0	25.2	16.2	21.3	8.0	10.1	4.3	2.9
全 群		9.5	22.2	16.5	21.2	9.3	12.3	5.7	3.3

図6 テレビの視聴時間×進路

——非進学群はテレビをよく見る——



のような生活スタイルの開きが認められる。

それでは、こうした視聴時間の開きは、具体的にどんな視聴態度の差をもたらすのであ

うか。表12は、テレビ番組名をあげてそれをどの程度見ているのかをたずねた結果で、これは、中学生について昭和61年6月に同じ

表12 見ているテレビ番組

——「オレたちひょうきん族」と「元気が出るテレビ」——

番組	性別・属性	毎週必ず見ている				中学生	年齢		性別別		性別・属性		
		男	女	わりと見ている	たまに見ている		2年	3年	男子	女子	つどめ	算数	大
オレたちひょうきん族		17.6	21.4	29.6	31.4	19.9	19.7	16.2	20.3	15.6	19.7	24.6	15.1
天才・かけしの元気が出るテレビ		15.3	19.3	28.7	36.7	20.6	16.7	14.6	16.7	14.5	18.3	21.2	13.5
6時半頃のニュース		13.4	28.6	29.2	28.8	7.0	9.2	15.6	13.2	13.7	10.3	14.0	15.1
プロ野球中継		11.4	24.1	26.2	38.3	8.7	14.9	9.6	19.1	6.4	8.8	8.5	12.6
夜のヒットスタンダード・ラックス		10.7	25.4	38.7	25.2	12.6	14.0	8.8	10.1	11.1	24.0	14.8	7.1
世界まるごとHDWマッチ		9.4	18.8	36.5	35.3	10.3	10.2	9.1	11.4	8.1	7.7	8.5	10.2
北米サッカーの世界		8.5	9.5	21.7	60.3	13.7	10.4	8.3	13.4	6.1	8.8	10.2	9.1
ベースボールトーナメントU.S.A.		7.6	13.5	28.4	50.5	3.3	8.7	7.1	9.2	6.5	4.6	9.3	7.9
オリンピックのニュース		5.8	16.0	27.2	51.0	2.3	4.2	6.6	8.4	4.2	2.7	5.1	7.0
ヨーロッパサッカーワールドカップ		3.8	19.1	44.4	32.7	5.1	4.8	3.2	6.2	2.1	2.7	3.4	4.6
サッカーワールドカップ		3.4	14.0	37.7	44.9	7.4	4.2	3.0	6.3	1.5	4.2	3.4	3.0
サッカーワールドカップ		3.5	6.0	19.4	71.1	1.7	5.6	2.4	8.2	0.4	3.1	4.3	3.2
サッカーワールドカップ		2.9	8.3	28.5	60.3	4.3	3.1	2.8	2.6	3.1	3.8	3.8	2.1
サッカーワールドカップ		2.4	5.6	21.6	70.4	3.8	2.7	2.5	2.8	2.4	4.6	3.0	1.4
サッカーワールドカップ		2.0	3.4	14.9	79.7	1.9	2.2	1.8	4.4	0.3	2.3	2.1	1.6
サッカーワールドカップ		1.9	2.9	14.7	80.5	1.8	1.9	2.0	3.1	1.2	1.9	0.4	1.7
サッカーワールドカップ		1.7	3.9	17.4	77.0	1.2	2.6	1.1	1.9	1.6	0.8	2.1	1.3
サッカーワールドカップ		1.6	2.8	15.9	79.7	1.6	1.7	1.5	2.9	0.8	2.3	1.7	0.9
サッカーワールドカップ		1.1	1.1	6.3	91.5	1.0	1.4	0.9	2.2	0.3	0.4	1.3	0.8
サッカーワールドカップ		0.9	0.8	7.4	90.9	2.8	1.1	0.9	2.0	0.3	0.4	1.3	0.4

属性別は「毎週必ず見ている」割合

項目を使って調査しているので、参考までに中学生との対比を試みてある（中学生の結果は『モノグラフ・中学生の世界』vol.25「中学生文化」にくわしい）。

	中学生	高校生
天才・たけしの元気が出るテレビ	①20.6	>②15.3(%)
オレたちひょうきん族	②19.9	>①17.6
北斗の拳	③13.7	>(⑦ 8.5)
夜のヒットスタジオ	④12.6	>(⑤10.7)
夜6時半頃のニュース(⑧ 7.0)	<③13.4	
プロ野球中継	(⑥ 8.7)	<④11.4

(○数字は順位)

中学生と高校生とで、見ているテレビ番組にそれほどの開きは認められないが、全体的に

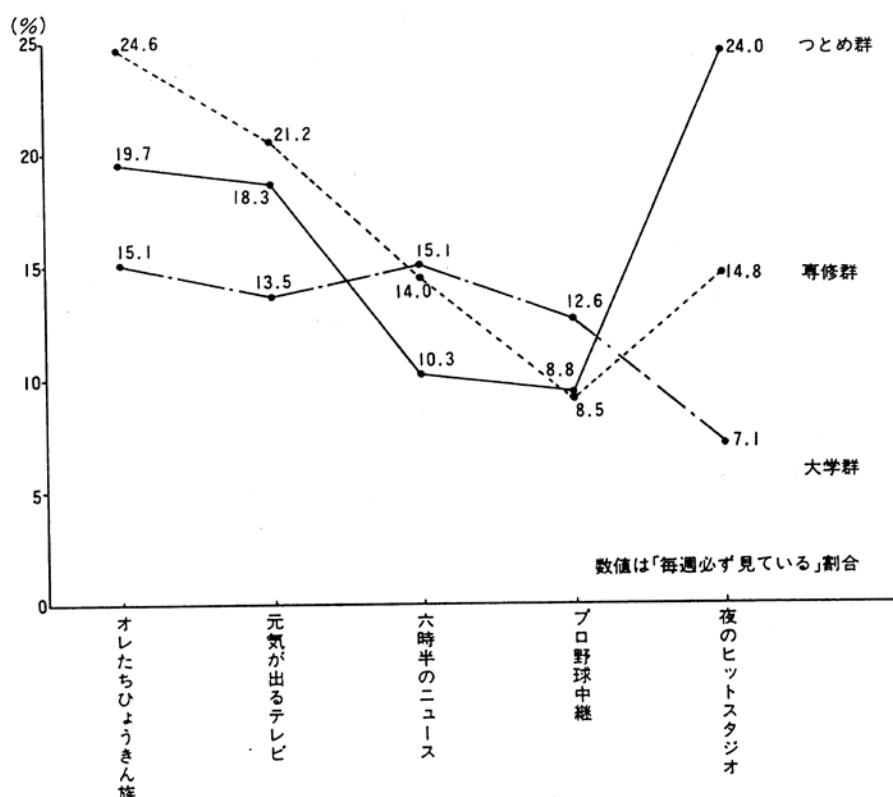
に高校生のテレビ離れが目につく中で、高校生たちがニュースを見るようになっているのが関心をひく。

もっとも、図7によると、進路によって見ている番組に開きが認められ、つきつめていえば、専修学校へ進む予定の生徒は「オレたちひょうきん族」を、そしてつとめ群は「夜のヒットスタジオデラックス」を見ている割合が多い。そうした中で、進学群はテレビを見ている時間が短いが、ニュースを見ているタイプとなる。その他、表12の中から最頻値に着目して、見ている割合の多い群をぬき出すと以下のとおりとなる。

●つとめ群 「夜のヒットスタジオデラック

図7 見る番組×進路

——つとめ群はヒットスタジオ——



ス」「夕やけニャンニャン」「女子プロレス」「トウナイト」「水戸黄門」「特捜最前線」の6本

●専修学校群 「オレたちひょうきん族」「元気が出るテレビ」「北斗の拳」「ベストヒットUSA」「オールナイトフジ」「クイズ・100人に聞きました」「YOU」「英語会話I」「キン肉マン」の9本。

●大学進学群 「6時半のニュース」「プロ野

球中継」「世界まるごとHOWマッチ」「夜11時のニュース」「月曜ロードショー」の5本。

こうした結果を手がかりにすると、つとめ群に芸能志向で、少しきついいい方をするとミーハー的な雰囲気、専修群にナウさや若者らしさ、大学群に硬派やアダルトラしさを感じられる。

### 3. タレントの好き嫌い

表13は、20人の知名人をあげて、その人が好きかどうかをたずねた結果を示している。この場合も表12と同じように、中学生との対比を試みている。

	中学生	高校生 (%)
明石家さんま	①34.8	= ①35.0
中森明菜	②30.4	> ③21.0
ピートたけし	③30.3	= ②30.2
とんねるず	④25.2	> ⑤16.4
松任谷由実	⑪7.5	< ④17.0 (「とても好き」の割合)

明石家さんまやピートたけしの人気は中、高校生でほとんど開きが認められないが、中学生に人気のある中森明菜やとんねるずが高校生になるとそれほど支持されなくなり、松任谷由実や江川卓のファンがふえ始める。

したがって、中学生から高校生への移り変わりは明菜から由実へと要約できるのかもしれない。こうした中で、進路別に人物の好き嫌いを調べると、図8のような傾向が得られ

る。大学群に、中森明菜や小泉今日子を好きとはいえないという反応が多い。それと同時に、専修群はさんまやたけしはむろんのことだが、松任谷由実やとんねるずなどのファンで、いわば高校生の代表という感じがする。なお、中森明菜に対する好き嫌いは以下のようないくつかの数値となる。

	好き	あまり好きでない	嫌い	知らない
中森明菜を	とてもまあ	好きでない	嫌い	知らない
つとめ群	31.3	41.2	17.7	9.8 0.0
	(72.5)		27.5	
専修群	30.0	32.9	25.7	11.4 0.0
	62.9		37.1	
大学群	15.5	36.2	29.5	17.7 1.1
	51.7		(47.2)	

中学生に人気のある中森明菜のファンが、つとめ群に多いあたりに、つとめ群の幼さを感じられるといえなくもない。

表13 好きな人・嫌いな人

——さんま、そしてたけし——

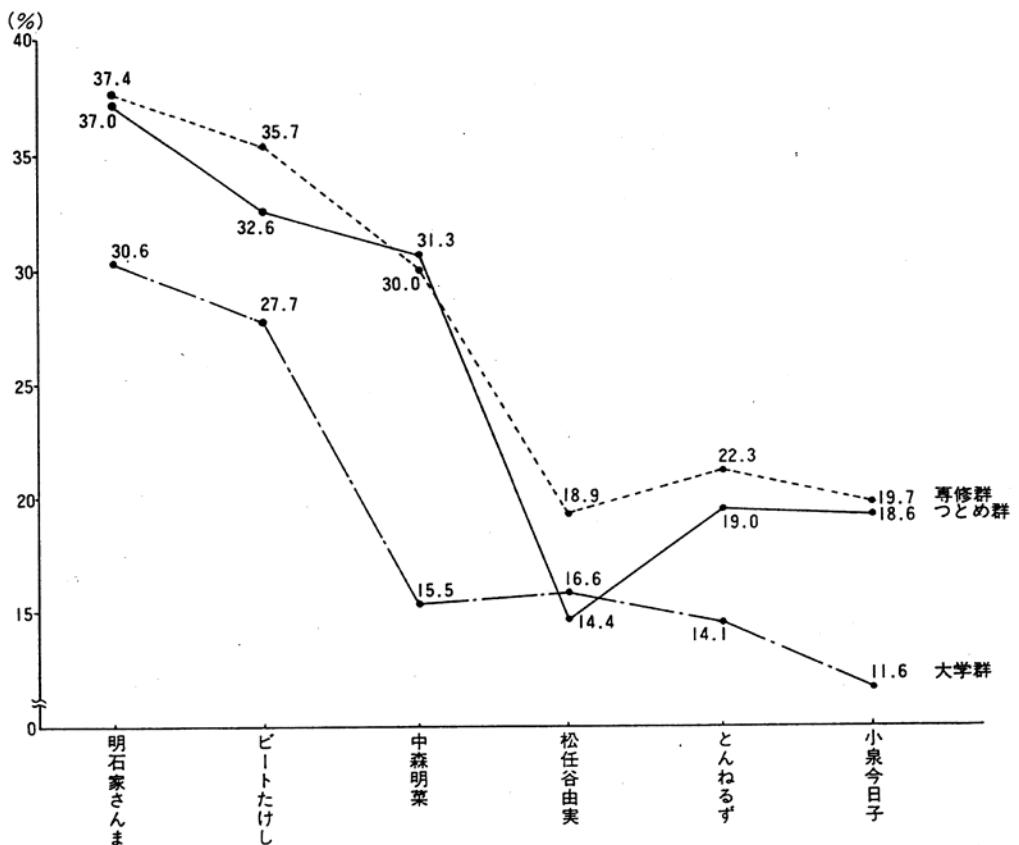
(%)

項目	尺度・属性					*1	学年	性別		進路			中学生
	とても	まあ	あまり	くらい	知らない			男子	女子	つどめ	専修	大学	
坂2 明石家さんま	35.0	44.4	13.8	6.4	0.4	35.5	34.8	33.0	36.4	37.0	37.4	30.6	34.8
ヒートたけし	30.2	49.7	13.3	6.4	0.4	29.8	30.3	34.0	27.7	32.6	35.7	27.7	30.3
中森明菜	21.0	37.6	26.0	14.6	0.8	25.4	18.8	20.6	21.3	31.3	30.0	15.5	30.4
松任谷由実	17.0	40.1	28.9	11.8	2.2	14.6	18.3	8.2	22.9	14.4	18.9	16.6	7.5
とんねるず	16.4	32.1	23.0	27.6	0.9	20.9	14.2	20.9	13.4	19.0	22.3	14.1	25.2
薬師丸ひろ子	14.7	41.6	30.2	12.8	0.7	14.5	14.7	11.2	17.0	14.1	13.5	14.5	12.1
小泉今日子	13.7	35.5	29.7	20.3	0.8	15.7	12.7	16.9	11.7	18.6	19.7	11.6	15.0
江川卓	10.3	22.5	33.9	31.6	1.7	9.9	10.5	15.6	6.7	9.1	8.0	11.6	6.7
少年隊	8.9	30.1	33.3	25.0	2.7	7.2	9.8	3.5	12.4	16.7	9.7	4.9	10.4
赤川次郎	8.9	38.8	33.2	16.0	3.1	9.1	8.8	5.8	10.8	10.6	12.6	7.6	15.3
古龍伊知郎	7.2	33.5	35.1	19.3	4.9	8.1	6.7	11.2	4.6	5.3	6.3	8.0	8.5
原辰徳	5.6	24.6	39.0	28.8	2.0	5.8	5.5	8.1	3.9	7.2	3.8	5.8	5.9
本田美奈子	5.4	17.2	29.9	45.1	2.4	7.3	4.4	10.1	2.4	7.9	9.7	4.2	11.7
久米宏	4.8	35.5	40.6	18.1	1.0	3.9	5.3	6.6	3.7	1.9	2.5	5.5	4.8
椎名誠	4.2	13.3	27.1	10.0	45.4	4.0	4.3	6.3	2.9	1.1	2.9	5.7	1.5
久石譲	3.5	30.7	37.1	28.1	0.6	4.4	3.1	4.9	2.7	1.5	2.5	4.5	5.9
中嶋裕之	3.4	16.2	43.9	34.8	1.7	4.4	2.9	6.4	1.4	2.3	2.9	3.8	3.6
柴田眞理	3.2	18.2	37.9	25.2	15.5	3.6	3.0	3.9	2.7	2.3	3.4	3.3	2.3
大曾根昌久	2.0	17.9	41.7	37.0	1.4	3.0	1.5	4.6	0.3	0.4	2.1	2.4	3.9
吉川敬	1.2	17.6	43.9	35.8	1.5	0.7	1.5	2.4	0.5	0.8	0.8	1.3	3.3

※1 属性別は「とても好き」の割合

※2 「モノグラフ・中学生の世界」以外のデータを採用

図8 好きなタレント×進路  
——大学群は明菜嫌い——



## 4. 音楽をBGMとして

現代の中高校生を象徴するのは、音楽好きという部分であろう。表13の松任谷由実や小泉今日子、中森明菜などが歌手なのはいうまでもないが、あらためて高校生の音楽好きの程度をたずねると、表14のように、カセットを毎日聞く生徒が58%と6割に迫っている。しかも、音楽好きという面では、進路による開きが少なく、わずかにより好きなのが専修群、次いでつとめ群、最後に大学群の傾向がうかがえるのにすぎない。

カセットかCDか、それともラジオの生番

組かはともあれ、高校生たちは毎日のように、音楽をBGMとして生活している。もっとも、表15によると、だからといってコンサートへ行ったり、ファンクラブへ入ったりすることなく、音楽的な行為といえばダビングをするくらいだという。同じ表の右欄に中学生の反応を示しておいたが、全体としての傾向に、中学生と高校生との間の開きを認めがたい。

なお、進路別に最頻値に注目して、音楽的な行動をどのタイプがより多く行っているのかをまとめてみると以下のようになる。

- つとめ群 ファンクラブに入る、ポスターを集める、芸能情報を見る、カセットテープの貸し借りをする、ダビングをするの5項目
  - 専修群 コンサートへ行く、プロモーションビデオの録画、レコードを買うの3項目
  - 大学群 なし
- ここでも、つとめ群のミーハーぶり——つ

き離してしまえば精神的な幼さ、良くいえば純粋さ——専修群のナウさ、大学群の禁欲ぶりが認められるように思う。しかし、こうした指摘は、各群の差をやや誇張した場合で、実際にはそれほどの開きは少なく、高校生たちはいずれの場合も音楽好きで、音楽をBG Mとした生活を過ごしている。

表14 レコードや音楽のテープを聞く

——高校生は音楽好き——

(%)

尺度		ほとんど きかない	たまに きく	1週間に1日 ぐらいきく	1週間に2~3日 ぐらいきく	毎日のように きく
属性	学年	3.9	10.9	4.7	15.5	65.0
	性別	4.9	18.0	6.2	16.3	54.6
並び	つとめ群	3.4	14.7	6.4	17.7	57.8
	専修群	1.7	11.8	3.8	15.1	67.6
	大学群	5.2	17.8	6.4	16.5	54.1
全体		4.6	15.6	5.7	16.1	58.0

表15 音楽的な行動

—ダビングをしている—

項目	尺度・属性	いつもしている				学年		性別		進路			(%)
		かなりしている	あまりしている	せんぜんしていない		2年	3年	男子	女子	つどめ	専修	大学	
1. あるアーチストのファンクラブに入っている		6.4	2.2	5.6	85.8	7.1	6.1	5.5	7.1	10.2	> 7.9	> 4.7	2.7
2. 好きなアーチストのコンサートに行く		8.8	12.0	33.3	45.9	9.0	8.6	6.2	10.4	9.8	13.0	7.2	1.6
3. テレビの音楽番組やプロモーションビデオを録画して楽しむ		11.0	19.0	29.4	40.6	11.0	11.0	12.6	9.9	7.3	16.8	10.6	7.5
4. 好きなアーチストの記事やポスターを集めめる		5.7	13.2	41.7	39.4	6.1	5.6	4.5	6.6	7.9	6.7	4.6	6.0
5. テレビや雑誌の芸能情報を見る		11.8	27.4	43.2	17.6	14.0	10.7	9.6	13.3	18.0	> 14.8	> 9.1	12.6
6. レコードやミュージックテープを買う		12.8	29.4	41.9	15.9	14.5	11.9	13.6	12.2	13.9	18.4	11.9	8.6
7. レコードやカセットテープの貸し借りをしたり、情報交換をする		19.6	33.2	33.6	13.6	22.0	18.4	18.0	20.7	25.0	24.3	17.0	16.7
8. レコードやラジオから、ダビングしていく		27.8	42.5	22.6	7.1	30.4	26.5	26.4	28.6	33.1	31.8	26.0	20.9

※属性別は「いつもしている」の割合

## 5. マンガや雑誌

それでは、生徒たちはマンガとどの程度接しているのであろうか。くわしい数値は表16のとおりだが、マンガ好きの生徒も多い反面、マンガを読まない者が3割近くに達する。そうした中で、進路別に見ると、もっともマンガ好きなのが専修群、マンガを読まないようにしているのが大学群(図9)となる。

そして、表17に読んでいる雑誌についての結果をまとめて示してみた。なお、同じような形で中学生を対象とした調査を行っているので、参考までに、図10に対比したものを探した。もちろん、中学と高校とでは読んでいる雑誌がことなるので、中学生には、「ノンノ」や「ぴあ」、「フライデー」などはたずね

ていないので対比の可能な雑誌に限定してある。

図10によると、さすがに高校生になると「明星」や「りほん」を読む者がへり、それに代わって「ノンノ」や「ぴあ」、「フライデー」などが登場てくる。好きなタレントについてふれる中で、中学生から高校生にかけて、中森明菜から松任谷由実への移り変わりが目につくと述べたが、雑誌についても「明星」や「りほん」から「ノンノ」や「ぴあ」への変化が認められる。

そして、そうした雑誌の好みを進路別に集計したものが図11である。この中に、将来の進路によりよく読む雑誌の傾向がことなって

いるのがわかる。

(他の群より) よく読む	読まない
つとめ群 ノンノ	少年ジャンプ
専修群 ぴあ	りぼん
ポパイ	ベースボール
大学群 少年ジャンプ ノンノ	少年サンデー フライデー 明星

(表17・図11)

大学群に男子が多く、つとめ群に女子が多い点が、こうした差をもたらした面も否定で

きない。しかし、そうした性差以上に、大学進学群が『フライデー』や『明星』『ノンノ』などを敬遠し、気晴らし的にマンガ雑誌を手にしているのに対し、専修群は『ぴあ』や『ポパイ』など、ヤングらしい雑誌を手にしている。そして、つとめ群は『ぴあ』を読まずに『明星』を見るタイプで、こういう面にもつとめ群のやや幼く、よくも悪くも大衆的な感覚がうかび上がってくる。

なお、マンガ的な行為についての傾向を表

表16 マンガの雑誌を読む

—男子の方が読む—

(%)

尺度		ほとんど読まない	たまに読む	1週間に1冊ぐらい読む	1週間に2~3冊ぐらい読む	それ以上読む
学年	2年生	17.3	34.1	20.0	19.6	9.0
	3年生	30.4	39.5	14.7	10.3	5.1
性別	男子	18.8	21.5	21.6	(24.7)	(13.4)
	女子	30.8	48.0	13.1	6.1	2.0
進路	つとめ	24.9	50.2	10.6	6.4	7.9
	専修	21.8	48.3	11.8	9.7	8.4
	大学	29.9	47.2	8.6	8.1	6.2
全體		26.0	37.6	16.4	13.5	6.5

図9 マンガの雑誌を読む×進路

—進学者はマンガ離れ—

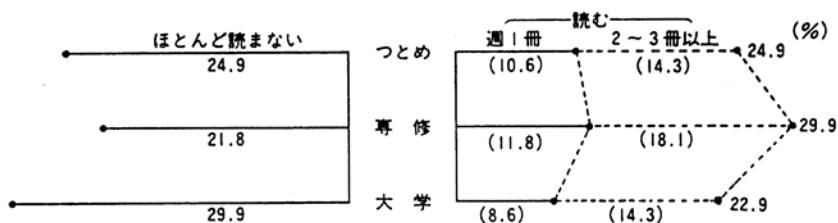


表17 読んでいる雑誌

—大学群=ジャンプ、専修群=ぴあ、つとめ群=ノンノ—

(%)

項目	属性	全 体	年 齢		性 別		道 路		
			2 年	3 年	男 子	女 子	つとめ	専修	大 学
週刊少年ジャンプ		29.1	39.7	23.8	(57.8)	10.4	20.3	31.8	34.9
ピーチ		27.9	23.0	30.5	5.9	(42.5)	33.8	31.8	19.6
ぴあ		27.2	29.8	25.8	32.7	23.7	17.7	33.1	29.8
フライデー・フォーカス		24.2	27.4	22.6	32.9	18.5	28.6	29.7	23.0
ヤングジャンプ		17.4	26.3	12.9	(39.9)	2.6	11.7	23.0	20.1
週刊少年サンデー		16.7	21.9	14.1	(35.7)	4.5	11.3	19.7	20.2
ボーナス		12.2	16.0	10.3	23.3	4.9	8.3	19.2	13.2
明星		10.3	13.0	8.9	8.9	11.2	19.9	16.7	6.2
オートバイ		8.7	13.0	4.5	18.8	2.2	7.9	14.6	8.1
平凡パンチ		7.0	9.1	5.9	16.9	0.5	7.1	8.8	7.4
レモン		6.3	9.5	4.6	1.9	9.1	16.5	7.1	3.6
ブリーフブック		6.0	7.6	5.2	2.2	8.5	14.3	7.1	2.7
アサヒグラフ		5.6	6.5	5.2	2.2	7.2	7.9	3.3	5.9
豪賞時代		4.6	1.1	6.4	3.5	5.3	0.0	1.3	6.0
日刊アサヒニュース		3.7	7.4	1.8	6.9	1.6	2.6	5.9	3.1
週刊マガジン・エイト		3.6	3.5	3.4	3.4	3.8	4.5	3.8	3.0
週刊エターナル		3.4	3.2	3.5	5.0	2.4	3.4	2.5	3.5
週刊エターナル		3.4	3.7	3.3	2.2	4.3	3.8	4.6	3.0
週刊エターナル		3.0	3.5	2.8	2.7	3.2	3.0	4.6	1.7
週刊エターナル		2.4	3.2	2.0	9.9	1.3	3.0	6.3	6.2

「よく読んでいる」割合

18にまとめておいたが、表15の音楽の場合と同じように、マンガ好きなことはたしかだが、そうかといって、特にマンガ雑誌に投稿したり、アニメ雑誌を読んだりすることはなく、せいぜいアニメのテレビを見るくらいだとう。

このように見えてくると、高校生たちはそれなりに、音楽やマンガ、テレビに接して暮らしているし、こうしたメディアを抜きにして、高校生の生活を語れないのはたしかであろう。しかし、全体として自分から積極的にコミットするというより、身のまわりにあるものを探しんでいる印象を受ける。こうした中で進路に着目すると、専修学校群は松任谷由実のファンで『ぴあ』を愛読し、「ひょうきん族」

を見るというようにヤングらしい感覚を身につけている。それに対し大学群は、テレビ視聴時間も短く、禁欲的な態度を通しておるが、それでも音楽をBGMとして活用しており、マンガ雑誌を手にしている。また、つとめ群は「夜のヒットスタジオデラックス」をよく見ている上に中森明菜ファンで、『明星』を愛読するタイプで、中学生らしさから脱皮していないというか、それともアベレージに近く大衆的といえば正確なのか、いずれにせよ庶民的な生活を送っている。こうしたタイプによる生活面での開きが顕著になってきた思いがする。しかし、その意味についての考察はまとめにゆづることにしたい。

図10 読んでいる雑誌——中学生との対比

——『明星』と『りぼん』は卒業——

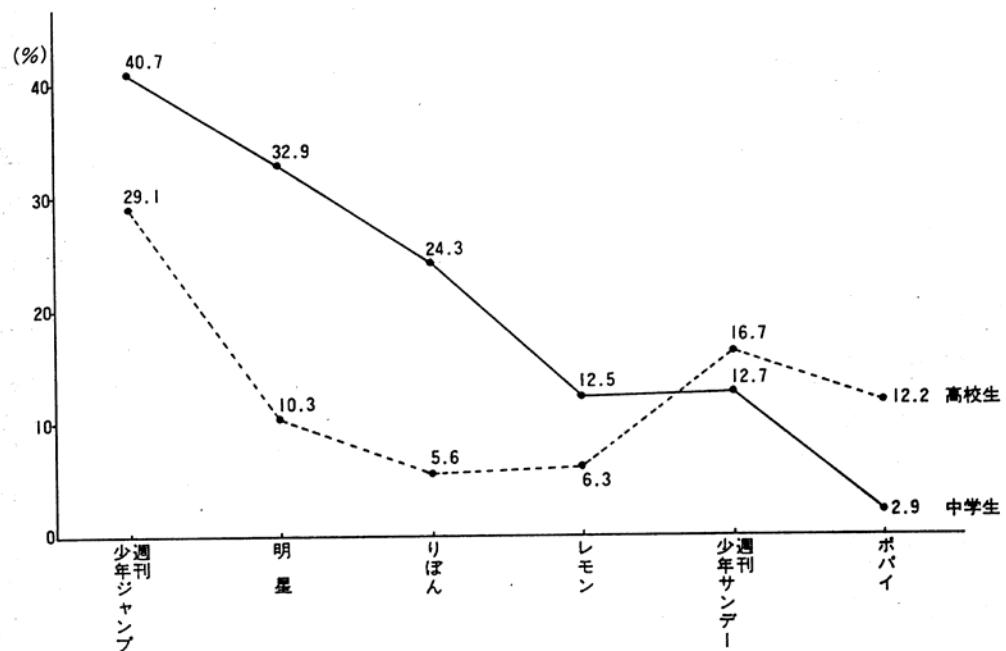


図11 読んでいる雑誌×進路

——つとめ=明星、専修=ぴあ、大学=少年ジャンプ——

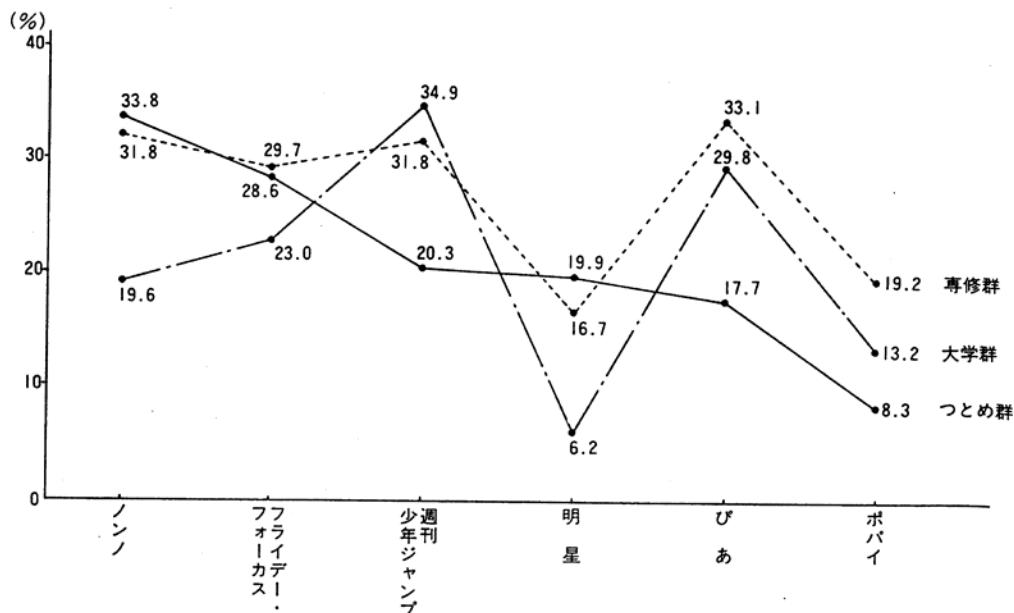


表18 マンガ的な行動

——マンガ的な行動はしない——

尺度・属性 項目	よくする	わりとする	まるする	あまりしない	ぜんぜんしない	学年		性別		進路		
						2年	3年	男子	女子	つとめ	専修	大学
1. コートなどにマンガのら書きをする	8.7	8.4	14.6	28.8	39.5	9.4	8.4	8.1	9.2	9.0	13.0	8.9
2. タタタニマンガを描いてあげる	2.1	2.5	4.4	16.1	74.9	1.6	2.4	2.6	1.8	1.9	3.8	1.9
3. 友だちや先生の似顔絵を描く	2.4	4.0	6.8	18.4	68.4	2.0	2.7	2.6	2.3	1.5	3.8	2.5
4. マンガのポスターを部屋に見る	2.4	1.5	4.3	11.5	80.3	2.3	2.4	2.7	2.2	2.3	4.6	2.3
5. マンガの上手本を読む	10.8	11.0	19.2	23.4	35.6	14.5	8.9	12.6	9.6	10.9	11.3	11.8
6. アシスタント見習	7.7	10.5	22.2	29.9	29.7	8.9	7.1	10.5	6.0	10.5	9.2	7.7
7. マンガのキャラクターの名前を呼ぶ	1.4	1.6	3.3	12.2	81.5	1.5	1.4	2.1	1.1	1.3	2.5	1.3
8. マンガのキャラクターの写真を撮る	1.7	2.0	4.0	11.3	81.0	2.1	1.5	2.3	1.3	1.5	2.9	1.7
9. アニメ雑誌を読む	2.3	1.5	2.7	8.9	84.6	2.3	2.2	3.3	1.6	1.5	2.9	2.9
10. アニメ雑誌や同人誌に作品を出す	0.6	0.5	0.8	2.7	95.4	0.2	0.8	0.7	0.5	0.8	0.0	0.6

※属性別は「よくする」の割合